

南島つれづれの記 その1(イキマ島の沈没)

矢崎 清 貫 (燃 料 部)

はじめに

筆者は羽田空港から「いわゆる南行便」にのって 宮古諸島を訪れたのが 昨年の7月までに7回をかぞえのべ滞在日数 200 日弱になる。この間には 夏雲が美しい東支那海の海洋地質調査 季節風によって气象台(宮古)はじまって以来の電の降る冬の日 正月休みを海水浴ですごした日 地鳴で起こされた地震の朝 ベトナム行き の B52 への空中給油の大音響 TV 放送を生で見られた日の感激 など多くの懐かしい思い出がよみがえってくる。

筆者が最初に宮古島を訪れたのは 1969年11月10日のこと 渡航も自由ではなく米軍の許可が必要とされていた しかし佐藤 ジョンソン会談(1969)がはじまる前のこともあって 多少簡略化されていたように思う。そのようなことと関係するのか 抗議デモやジグザグ行

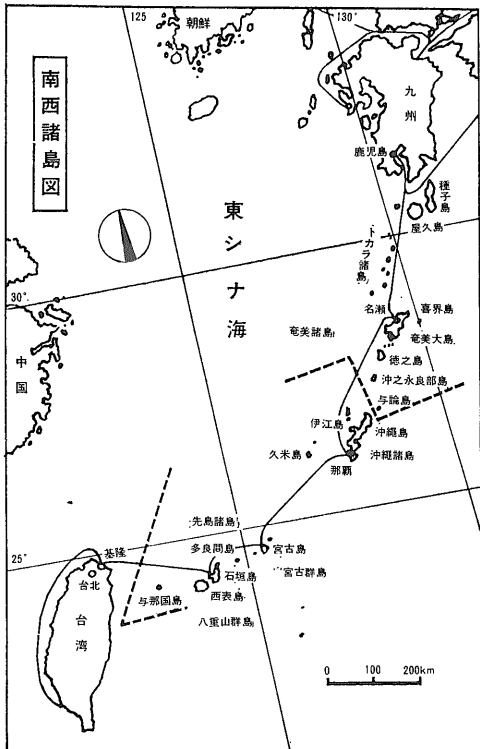
進の熱風の前の静けさというのか いたって落ち着きのある日々のように記憶している。その後 1971年の復帰前の6月以後毎年のように変わりゆく島々のようすをみつめてきた。この間に筆者が体験したいくつかのことがらを 「メモ」風に綴ったものがこの雑記である。

原始日本人の発祥地は宮古か？

沖縄への旅行ガイドや市町村の観光協会が出しているキャンペーン用のポスターには 南十字星が見える亜熱帯の島 海と空と太陽 七色に変わるサンゴの島などのキャッチフレーズをよくみうける。たしかに 美辞麗句にいわれるように 多くの自然と伝統的文化にはぐくまれた魅力のある島々である。ここで紹介する宮古諸島は それぞれ異なった香りのする文化と ことなつた伝統と ことなる方言があるように 島それぞれ特有の文化と 何世紀かにつちかわれた人間的な個性ゆたかな島々である。

宮古諸島には 宮古島 ^{イラブ} 伊良部島 ^{クミア} 下地島 ^{クミア} 来間島 池間島 大神島 ^{クララ} 多良間島および水納島がある。このほか無人島のフテ岩が 大神島の北東 8km の洋上にある。これらの島々の中で 多良間島と水納島は 宮古島の南西約 63km の洋上にある離島苦で代表される過疎の島であり 古くは流人の島とされていた。

柳田学と呼ばれる民族学の大先生柳田国男は 1952年に「海上の道」という表題で原始日本人が この極東列

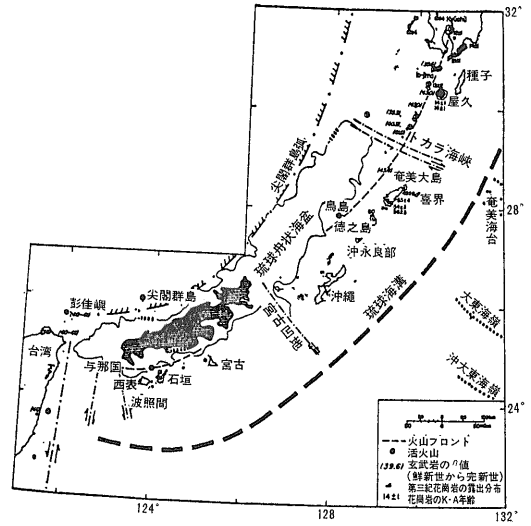


第1図 位置図



第2図 1969年11月ごろの那覇空港「日本円は売切れました」のスタンプ

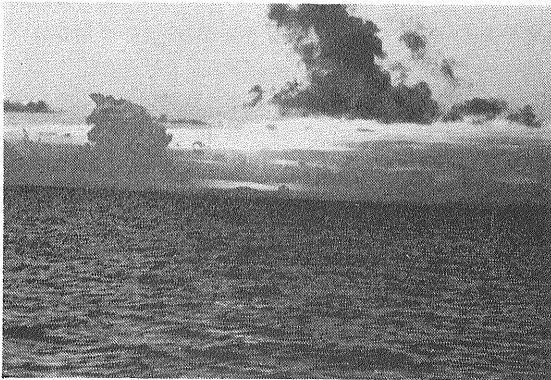
島に最初に上陸してきたのは南島ではないかという問題を提起しており しかもその一説として宮古島の名を挙げ その時を今から約2,000年前と 大胆な仮定ではあるが日本研究の結論としている。 この仮定の根拠としては 多くのことが理由とされているであろうが シプレヤニモタ・シプレリアニユラスという宝貝のもっとも多く産出する宮古島と 柳田の常時だいていた漂着の思索が大きな要因になっているように想える。 現在でも多くの若い人たちに愛謡されている「椰子の実」の歌は島崎藤村が先生の話聞き 書いたことを「海上の道」の中でべている。 漂着の思考は 偉大なる民族学者の晩年に抱いた人間味ゆたかな哲学であったようにも感じとれる。 この仮説は 定説とならず 「大いなる発展性」を持つ説だということが 沖縄民族研究者達には認されているようである。



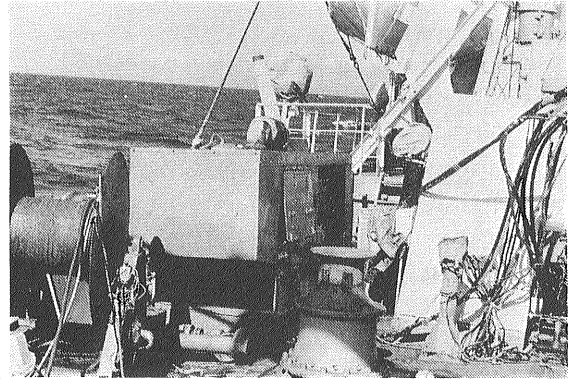
第7図 琉球弧の構造区分 花崗岩年令の単位は100万年(1972 小西による区分)

宮古では 宝貝のことをスピ貝と呼んでおり その昔琉球王国から輸出品として一船で550万個や39万個の宝貝が支那へ搬出されている資料(歴代宝案記載)がある

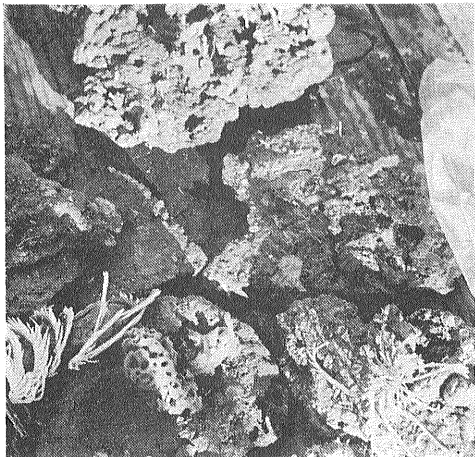
ことから かなり豊富の宝貝を産したことは事実であろう。



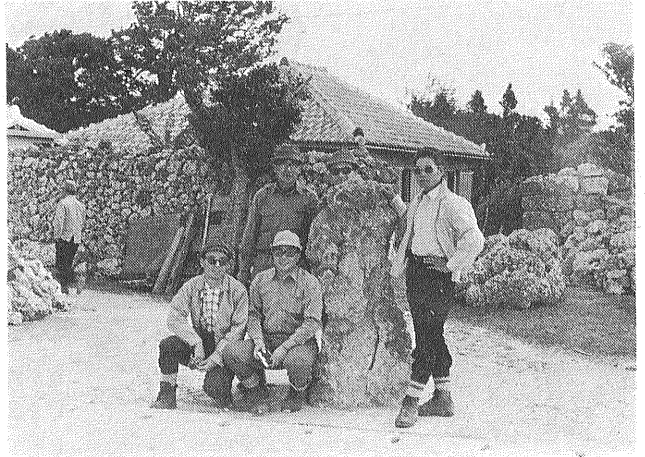
第3図 宮古島の日の出と夏雲 平良港は暗礁が多く危険なため 夜着いた船は日の出まで「沖泊」して明るくなってから入港する



第4図 1971年6月夏雲湧く東支那海での海上調査



第5図 1971年6月大陸タナの崖より引き上げた細粒砂岩 みた目は硬く 古第三系ぐらいに考えていたが 有孔虫分析の結果鮮新世とわかる



第6図 宮古島の税ばかり「人頭税石」 右にみえる石は役人のすわる石である 後の人家のまわりは風よけのため石灰岩を積み上げた石垣

日本をふくむ極東方面で宝貝を産する地域は 沖縄先島の珊瑚礁地域に限られている。 その中でも宮古島の周辺には 広い大干瀬がいくつかあって もっとも美しい珊瑚礁がみられることから その昔もおそらく多くの宝貝を産出していたものと予想される。 このようなことが 宮古島を日本人の発祥地に想定された理由の一つである。 中国では大昔の「殷の世」から「秦」の始皇帝が銅を通貨として鑄造するまで 宝貝が通貨の最たるものであった。 その事は 売買関係 財産関係 貸借関係等の漢字に「貝」の一字が入っているのでも想像できる。 たとえば 売 買 貨 貯 販 資 貧 貴 貸 費 賃 財 賑 購 賂 賜 賞 賀 らの文字に「貝」の字があるのは 宝貝が通貨であった証拠とされている。 特に黄色いだ円形の輪を持っている シプレオモニタ シプレリアニュラスの二種の小さな宝貝は 最大な価値があって 当時の人々の利慾願望の中心であったようである。

柳田学のもう一つの漂着の思考は 最近の海洋調査や AMT X 調査の成果に多くの結果が期待される。 何回か宮古島海岸の調査を実施してみて 漂着物の多い浜は北東海岸であって とくに島尻から吉野にかけての砂浜が顕著である。 季節風は 11月中旬より 1月の末頃までが もっとも強く 2月になれば東支那海低気圧（台湾坊主）の季節となる。

いつの日の調査か明らかな記録はないが 与那浜崎の海岸で「毛沢東」の言語録（文革の折に紅衛兵が手にしていた）を拾い感心したことがある。 このほか 椰子の実や木材（根のついた）らを多く見うけたり 先島尻層群の転石を拾い集めた思い出がある。 このようなことから 潮流と季節風の法則に照らしてみても 大陸か

ら人が漂着したのは この島ではなかったらうかという説もうなずける。 それを意味づけられるかどうかは疑いがあるが 福山海岸の断崖の中腹に石畳をみごとにしきつめた洞窟がいくつか発見したが おそらくその当時のものであるまいか。

宮古の島々には 近世に入ってからまで唐人漂着の事実が折々ある。 とくに明治6年宮国海岸で坐礁した ドイツ商船や 多良間島に漂着したオランダ商船らの遭難の記録が残されている。 このような大きな船は 当時としても一つの事件として歴史のなかに記されているが 多くは小人数の小船であって 島民と接することもなく帰っていったものも 住みついたものもあるという考えが妥当のように思われる。 このようなことを もっともよく伝える伝説が 水納島にみられる「百合若」物語であろう。

島の四季

黒潮が洗う島々の調査期間は 台風シーズンをさけて そのほかの期間（10月～7月）を7回の調査で体験した。 東京をたつ時は 大寒のさなかだからと多少多くの衣服を準備する。 だが年間平均気温 23°C という気温は何回いっても予想が狂い いたずらに荷物運搬をやってしまう。 この島々の四季は顕著ではない。 年間を通じて花が咲き 虫が鳴き 蝶が舞う。 しかし現地の人々の服装は 本土と同じようにコートを着たりアノラックを身につけたりしている。 寒い1月の末に羽田を出発して 1,800km 離れた宮古空港に降りたってみると 太陽はサンサンと輝き 夏雲が浮いている様子はまさに別世界である。 気温は 27°C クーラーが必要となる。 それにしても早いものである。 スモッグで淀んだ東京を10時に出発して 夕方4時には自然がいっぱいの島に着き 肌にくい込むオゾンを感じる。 まさに冷蔵庫から引きだされたビール瓶のように 気化熱であせをかく体調が気温に同調するまでは 2～3日が必要である。 その2～3日は 東京の夏と同様な暑さを感じるが 体調が現地の気候になれるようになると 亜熱帯の国といえども寒さを感じる日がある。 寒いといっても 朝夕息が白くみえる日はなかったように記憶する。 6ヵ年つき合った安田さんは 毎朝USA製の温度計をみてるのが日常で 今朝は何度と報告してくれたが 冬の期間でももっとも低い温度が9°Cであった。 彼の話しでは この島には9年に1度位の割合で霜が降るといふ。 それが昨年3月3日 宮古气象台はじまっていたらいの電が降った。 ちょうど電の降った日は 伊良部島の南岸を調査中であまり寒いので半袖の作業衣の上に雨合羽を着て昼食を取っていた頃 宮古島の北部狩俣付近に徑



第8図 1971年6月尖閣列島の魚釣島南斜面 地層の走向が N60°E デップが 14°NW でやや緑色をした細粒砂岩と灰色頁岩のリズミカルな互層である

2cm内外の雹が降ったと後で聞かされた。現地の人々は雹というものを見たことも聞いたこともなく勿論雪についても同様でしばし何ものかと迷ったとのことである。1970年の正月は宮古島ですごした。たしか現地では正式に正月休をとれた最初の年で何となく手持ぶたさの休みであったようである。

しかし子供達は大いに寒中の海水浴をエンジョイしていた。おかげで筆者も正月休の海水浴を体験出来た。冬の海水浴といっても黒潮をもらにうけるこの島では水温が23~25°Cで気温は27°C内外で東京での海水浴と余り変らない多少風が強いことが寒さを感じずだけである。宮古島の正月ははなやいだものではない丸餅を焼いて食べる程度のことだとあるレストランのオカミさんが話してくれた。本土のようにたくさんの料理をつくることもなく守護神と仏壇に食塩と酒を供え新年の諸々の祈願をしてから戸主を中心に献盃をして祝い非常に簡素な行事である。これに比較して旧1月16日は16祭と呼んで大変なご馳走が出るし大勢の親族が集まる。本土の盆と正月が一諸に似たような観がある。

この期間の旅はなるべくひかえるのが賢明である。2月から3月は連日の如く雨雲がたれさがり野外調査に多くの障害にあう季節である。いわゆる東支那海低気圧(台湾坊主)がこの付近から発生し北上して日本列島外帯の大都市に春の大雪をもたらしている。この低気圧の発生機構の究明のため世界の気象学者が参集してAMTXという大がかりの研究が2月~3月にかけて実施されている。この頃の空はちょうど東北地方の晩秋にみられるように千変万化しまさに「女心と秋の空」である。この島に降る年間降雨量は2月~3月にかけてのもの5月~6月にかけてのいわゆる梅雨時期の雨と台風によるものが主である。このうち2月~3月頃に雨の少ない今年のような年は梅雨時期が長かつ雨量が多いといわれている。したがって2月~3月頃に雨の多い時は梅雨時がからつゆになる。

1974年の2月~3月は連日の雨で参ったことがある。とくに雨あしの早いと雨量の多いのには驚く雨具をつける間もなくものの2~3分でずぶぬれになってしまう調査用具も写真機もしばらくはまったく使用不能になってしまう。とくに宮古島のように樹木の少ない島では逃げる場所がなくずぶぬれを覚悟しなければならぬ。そうかといって常時雨具つけているにはとても暑くて辛抱できないし傘では風に抵抗できえず降参した苦い経験がある。

本土でいう春の4月~5月にかけては桜の花をみることもなく春蟬(イワサキクサゼミ)と八重干瀬の時期となる。春蟬は九州南部から南西諸島にかけて生息する本邦でもっとも小形の蟬で東北や北海道でみうける「アブ」によく似ている。鳴声は態形に比較してしげくとくに多量発生するのか他人との会話が出来ないほどないてくれるし人恋うるごとくどこにでも来てはとまり鳴いてくれる愛らしき蟬である。

「干瀬はさながら一条の練絹のごとく白波の帯をもって島を取り巻き海の瑠璃色の濃淡を割している。月夜などにも遠くから光って見える。雨が降ると潮曇りがここでぼかされて無限の雨の色と続いてしまう」これは柳田国男の「干瀬の人生」の書き出しである。春の大潮は例年4月の初めにみられる。宮古島の周辺には多くの干瀬がありその代表的なものが八重干瀬という干瀬で池間島と大神島の東北フテ岩に接近して顔を出す。この八重干瀬は宮古本島に匹敵するほどの広大なものである。この八重干瀬はふだんは2m足らずの海底にかくされている暗礁であるが干満の差のはげしい大潮のときには干潮時に海の表面にあらわれる。とくに旧3月3日の「サニツ」と呼ばれる浜下りの日には人びとは老若男女こぞって八重干瀬に出かけて魚介をとり弁当をたべ楽しい1日をすごす。この八重干瀬には百ぐらいの干瀬がありなかでもっとも大きなものは「ドウビシ」と呼んでいる。その大きさは池間島と来間島を合わせたくらいである。このほか東海岸にも2~4の小さな干瀬がある。この時期の海岸の調査は非常に効率が良いふだんはあるけない浜でも多少海に入ることを覚悟すれば島の大部分は回れるからである。とくにラグーン(礁湖)の浅瀬をつたってリーフ(礁縁)にでられ外洋の真黒い海の底が多少でも見られることである。

干瀬の期間は4月~5月にかけて干満の差はげしく与那覇湾や大浦湾は対岸まで海の中をあるくことも出来るし分単位で海の幸を多くえられ調査の帰路蛤をたくさんとりすぎて処分に困ったことがある。

宮古島での夏の経験は1971年の夏と昨年の夏の2回である。1971年の夏は主として船上での生活で暑さも潮風に消され余り気にならなかった。しかし昨年の夏は多良間島と宮古本島で沖縄の夏を満喫した。現地の人々は沖縄をみるならば夏に来ることだという。特に宮古本島から多良間島に旅をするならば夏が最もよい。冬の期間は海が荒れ長逗留を覚悟しなければならぬ。このようなことは沖縄を旅行する人た

ちの普通の常識であるという。たしかに冬の日が多良間にわたるのは大変なことのようである。1969年の冬伊良部島の白鳥崎から多良間通いの船をみたが大海原に木葉のごとくゆれる船体のみていまに沈むのではないかと心配しながら船影を追ったことがある。

6月のはじめには梅雨があけるのが例年のことのようにであるが昨年は2月～3月に雨がすくなく長い梅雨であったとのことであった。1971年の夏の東支那海での海洋調査の時は6月4日スタートしたが連日好天気恵まれ作業計画が100%+ α で大いに海上での生活をエンジョイした。

おかげで事務長とコック長が入港のたびに食糧の仕入に多忙をきわめたようである。それにくらべて昨年の6月は梅雨が長かったこともあって「スカット」晴れ上がった日ざしは少ないように思えたが7月に入ると海はガラガラと輝き汁はダラダラ流れるしのがかわき「グリム」のおとぎ話の「姉と弟」のように水が飲みたくてたまらぬ日々を送った。しかし水は島それぞれによって事情が異なり辛抱しなければならないことが多い。珊瑚礁の島に特有の砂浜は考えただけでも暑さを感じるし実際砂浜は「テリカエシ」と焼砂で足裏がいたい。だが浜には浜風が常時吹いているので思ったより涼しい。浜風といえど大神島や来間島の分校におじゃました時に校長先生が校舎のノキ下に机を持ち出して来ており夏になれば「ここが職員室になります」といわれた。なるほど周囲に壁のある教室より浜風のあたる日陰のノキ下のほうがはるかに涼しい。

羽田を出発する時完全装備をした一行に合った石垣島での野外調査をするのだそうだ。まさに虫一匹も入る余地のない服装である。勿論行く先の島と目的によっては完全装備が必要であろう。とくに石垣諸島には「ハブ」も「山ヒル」もいることだし念には念を入れることが肝心であるが余りにも風変りの服装にみえる。筆者が多良間島に滞在していた折りに某大学の先生が昆虫採集にこられた。その服装をみると羽田でみた先生方と同じように完全装備である。翌日その先生の服装は小生らと同じように不完全な「ラフ」な作業姿になっていた。やはりこの島では虫一匹も入らぬような服装では仕事が出来ないのである。6月～7月にかけて野外をあるいてみて感じることは本土の常識的な服装ではとても夏の野外をあるくことは困難である。肉体を出して硬い石灰岩をたたくことは常時危害にあう。しかし多少の外傷よりも暑さの方が辛抱できない。このようなことから小生の外業靴の中に

は外傷用の「マキロン」・「バンソウコー」および蚊とり線香を常時入れておく。蚊とり線香は日陰や風のない茂みのなかでの作業には欠かすことが出来ない。実際は気やすめだけで余り効果はない。

サンサンとふりそそぐ夏の太陽は熱いではなくいたさをかんじる。1974年の6月同宿していた青年が2～3日海水浴にいっただけで全身火ぶくれになり完治するまで3ヵ月かかったという手紙をもらったことがある。現地の人々は海水浴は日中でかけない太陽の昇る前か太陽の沈んでからである。火ぶくれというと筆者も昨年の夏胸のポケットに入れていた金属性のライターの反射で大きな火ぶくれが胸に出来て驚いた。服の上からのことである。勿論直接太陽にさらされている腕は2～3日すれば水ぶくれが出来てむけてしまう。このようなアクシデントのなかでの外業は服装にしても機材にしても多少の配慮が必要である。帽子とサングラスは必需品とされるが実状は風が強いこともあって飛ばされることが多くてわずらわしい。サングラスは岩石を見る時にかけたり取ったりすることによってかえって目がつかれてしまう。金属性のクリノメータは反射で目がくらむ出来るだけ木製がよいように思う。

よくいわれるが「郷に入ったら郷に従え」でとくに服装の点では現地の人々をまねることである。現地の人たちは余り帽子をかぶらないし運転手をのぞけばサングラスも着用していない。よく見うけるのは手拭を頭にかぶるスタイルである。筆者もそれをみない帽子もサングラスも使用せず何とか日射病にもならずにごぞせたことが不思議に思う。

今考えてみれば宮古島の島々は以外と夏がしのぎよいのではないかと思う。現地の人々は夏がもっともよいから夏に来なさいという。そのような理由が夏を体験してみればはじめて理解出来たような気がする。

1969年11月から1970年1月の初旬にかけての60日間を宮古島ですごした。寒い国での生活の長い筆者にとってはなんとも言いようのない年末年始を体験した。事実寒中に海水浴が出来るし日ざしは強いし日中の最高温度は25～28°C内外示し冬という認識がうすれてしまう。でも11月から1月にかけての季節風は想像もつかないほど強い風である。宮古島と沖縄本島間の空路にはYS11の機種で飛ぶのであるが風速が20m内外になると欠航する。季節風の強いこの期間はしばしば欠航があって2～3日続くことがある。風速20mといえどちょっとした台風なみで野外の作業は

多くの危険がともなう。島の大部分の海岸は断崖でそのうえに第三紀層と石灰岩の境がその8合目か9合目に位置している関係上どうしても断崖の上にあがったり下がったりしなければならぬ。しかもその頂上付近の断崖は硬い石灰岩のため垂直の壁である。この壁に手足をかけた下から吹き上げて来る砂混りの強い風にあうと不安定な足場とたたきつけられる岩片の痛さとがあいまって恐怖を感じる。しかし風のあたらない日溜は半袖1枚でなお汗をかき暑さをおぼえる。

宮古の島々は年間を通じて風が強いが季節風の吹く期間がいろいろの点で大変な時期のように思う。そのようなことが理由になるのかサンゴ石灰岩の「ノッチ」やキノコ状の風化を示す石灰岩が北海岸に顕著である。

イキマ (Ikima) 島は沈没したのか

東京地学協会報告第7年報(明治19年 西暦1885)という報文の中に沖縄宮古八重山紀行。賀田真一氏の論文がのっている。その論文の付図73万6千分の1「日本沖縄宮古八重山諸島地質見取図」(A Geological Sketch Map of the Island of Okinawa Miyako and Yaeyama)のなかに宮古本島南南東約37kmの海上にイキマ (Ikima) 島 東西4km 南北1.5~2kmの島が明瞭に記入されている。

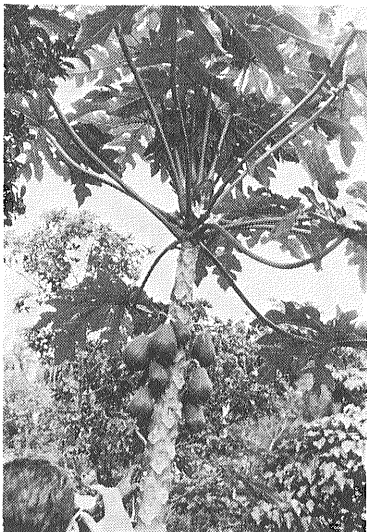
このほか柳田国男の「海南小記」(大正14年)の中に挿入されている付図(宮古列島)のなかにもイキマ島として記入されている。この両方の地図とも何らかの地図からの引用したものであることは紀行文ならびに報文らの内容からうかがわれる。しかし現在(少なく

とも昭和9年頃)の地図には海図を含めてみても島は勿論痕跡らしきものも記入されていない。そうかといって両人が引用した地図がそうデタラメのようにも考えられない。

その理由としては現在の20万分の1にも入っていない「フデ岩」(現存する島である。現在の5万分の1には記入されている無人島)らが明瞭に認められていること。地質学を専門とする立場の賀田氏は職業上そうデタラメな地図を使用しないだろうという推測。とくに柳田は地名などの研究の立場から多くの地図を集めていたことは有名である。とくに当時としては大変なことであったはずの5万分の1地形図を明治42年(1909)にすでに全国のものを手に入れている。そのほか宮古周辺の島も現在と寸分も変わっていない。このことは八重山諸島にも沖縄諸島についてみても同じように変わっていない。このようなことからこの地図はかなり信憑性がありそうに思える。

賀田氏の地図と柳田氏の地図とでは約40年間の「ズレ」がある。したがって現代のように情報文化が進んでいたとすればイキマ島は少なくとも40年以上島としての形態をとどめていたことになる。しかし現地のご老に聞いても古い文献を見てもこの島にふれた話や記述はない。また当時者である賀田柳田らの報文ならびに紀行文のなかにもこの島については何らふれていない。

そこでここで取りあげたイキマ島の入った地図はいったいつごろの地図が原図となっていたのかあるいは柳田の「海南小記」(大正14年)が出版した頃まで現存していたのか昭和初期に沈没したのか多くの謎が生まれてくる。



第9図 パパイアの実 年間通じて食べられる乙な味がする 現地の人は油でいためておかずにする



第10図 アダンの林 うれた実は赤く色づき食べられそうであるが食べられないという(その後わかったことであるが食べる地方もあるという) 地質層崖かせの樹木である

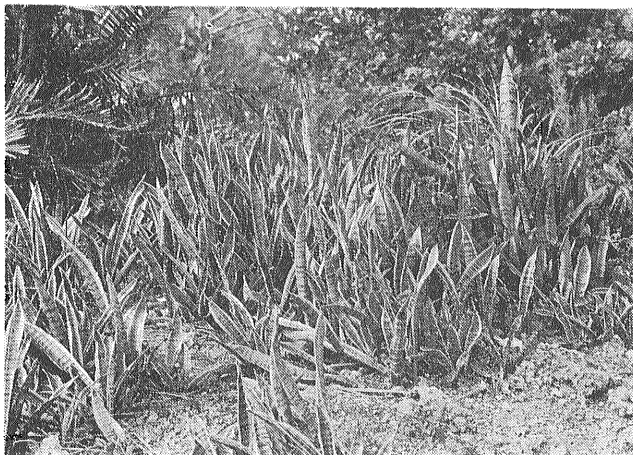
そこで 賀田氏が引用したと思われる明治初期の地図の歴史をひもとく必要がある。とくに 琉球国→島津の附庸地→日本国という 行政上の経過をへて来た さいはての島の地図ということになると 多くのあいまいな点がある。しかし 地図の上からみると かなり古い時代から 小琉球 大琉球 ミヤコ諸島という 言葉の上の概念はあったようである。そのことは 1570年頃の世界地図や東インド図などに描かれている 琉球国が入った地図としては 1585年頃の行基型日本地図が最初である。その後慶長図(1605) 正保図(1644) 元禄図(1697) 享保図(1719)の四回にわたって 大日本国興地図が調製されているが 南西諸島は入っていない。この4組の地図のうち 慶長図は年代からみて当然日本国に入っていないこともあって当然であるが その後の3枚の地図の時代には すでに日本国に帰属していたにもかかわらず入っていない。このことは 島津の政策上の理由に起因しているように思われる。元禄以後の国絵図は 1世紀以上も中断され 文政四年(1821)に伊能忠敬らによる実測日本全図が完成し それを天保国絵図と呼ばれているものである。しかし伊能は 九州の沿岸や 伊豆七島の実測を実施しているが 琉球列島についてはふれていないことから この地図にも入っていないことが推測される。伊能図は 秘図としてあつかわれ一般に公開されず 半世紀後の慶応3年(1867)に はじめて「官版実測日本地図」として発行された。明治3年(1870)には その地図が大学南校によって再刊されている。

その後明治10年(1877)には 伊能図を基礎にして 従来の地券図や 諸図を参考にして160万分の1の「日本全国興地図」を作成している。さらに翌年の明治11年(1878)には 参謀本部を設けて地図課と測量課が出

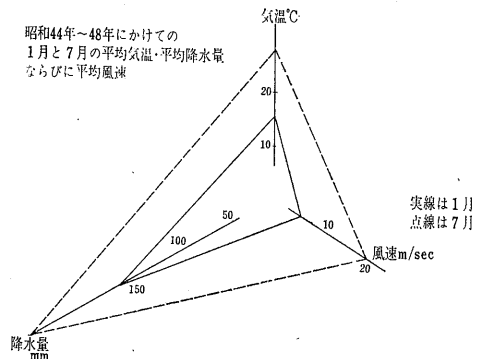
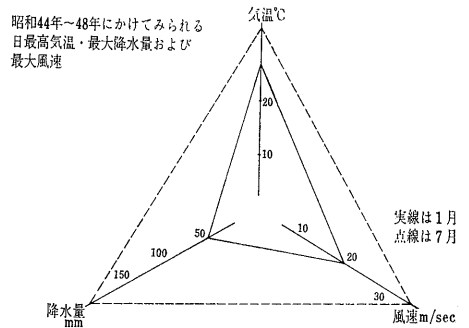
来ている(のちに地図課と測量課は 明治21年(1888) 陸地測量部として独立している)。そこでの最初の仕事は 三角点を置かない実用的な地形図作成に着手している。これとともに全国の概観図を必要としたので 伊能図を基図として 天保国絵図および各府県の資料によって縮尺20万分の1 地図が編集されている。これが「輯製20万分の1 地図」と呼ばれ 経度1度 緯度40分ごとの図面に区切られ 地形の表現はケバ式を用いている。この地図は 明治初期のわが国の代表的な地図であるとされている。

以上のように 日本の地図の変遷をみてみても 琉球列島のさいはての小島が どの地図から記入されたか曖昧な点が多すぎる。したがって賀田氏が引用した地図が「輯製20万分の1 地図」からのものなのか多少の疑問はあるが「ケバ」式を使用していることなどからみると 妥当性があるようにも思える。しかし 縮尺ならびに尖閣群島の現在の魚釣島が Hoapinsu 黄尾礁(久場島)が Tian su となっていることからみると 疑問も残る。

最近出版された「宮古島与那覇邑誌」によると 1843年オランダ船が宮古を測量したことをしるしてある。それによると 「本年12月1日大平山島にオランダ船1



第11図 野生の「トラノカハ」東京で求めれば1鉢300~500円はするであろう



第12図

琉球海域における大地震記録 (理科年表 昭和50年による)

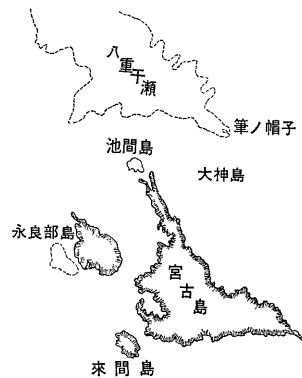
日本暦	西暦	震度M	地名	被害摘要
寛文 4	1664		琉球	琉球の島島地震 付近の海底から噴火 家屋土中に覆没 津波あり
7	1667		宮古島	地震強く 洲鎌村で早田 1,210 坪 3 尺沈下して水田となる
元禄 9. 5. 2	1696. 6. 1		宮古島	府庫 拜殿 寺院 仮屋などの石垣が崩壊した
宝永 3	1706		宮古島	死者が出た
宝暦10. 4. 1	1760. 5. 15		琉球	城垣57カ所くずれ 余震があった
明和 5. 6. 9	1768. 7. 22		琉球	王城 三カ寺 王陵 極楽陵の石垣がくずれた 津波(波高1m)慶良間島民家9戸が損じた
明和 8. 3. 10	1771. 4. 24	7. 4	宮古・八重山群島	震害はなさそう 津波により被害は甚大だった 石垣島で最高28丈(一説によると約40m) 全体で家屋流出3,237 溺死11,741人(八重山地震津波)
寛政 3. 4. 11	1791. 5. 13		琉球	津波来襲す
天保13. 3. 7	1842. 4. 15		宮古島 多良間	3月5日~14日に数十回の地震 7日の地震で宮古島の石垣が崩れた
明治31. 9. 1	1898	6. 5	宮古 石垣	家屋半壊2 山くずれ 石垣の崩壊
明治34. 6. 24	1901	7. 9	奄美大島近海	関東地方まで地震を感じた 名瀬市内で石垣崩壊などの小被害があり 小津波があった
明治42. 8. 29	1909		沖繩	那覇 首里で家屋半壊3 死者1人
明治44. 6. 15	1911	8. 2	喜界島近海	有感域は関東に及び 喜界 沖繩 奄美大島に被害があった. 死者12人 家屋全壊422
昭和13. 6. 10	1938	6. 7	宮古島北北西沖	津波来襲 平良港で振幅1~1.5m 桟橋流失し 帆船に損害があった
昭和45. 1. 1	1970	6. 1	奄美大島付近	負傷9人 その他小被害あり

隻 乗組員 181 人上陸して海岸に天幕を張って16日間測量して帰国した」とある(当時から明治の初期までは宮古島のことを大平山島と呼んでいる)。そして測量の方法は前山の福木に旗を立てていることからみて おそらく交会方法か三角測量方法かのいずれかの方法で実施したものと考えられる。以上は主として陸地での測量ということになるが 海図からの検討をする必要がある。

とくに宮古群島のように標高の小さい島々では 島の周辺を回ることによってその全貌を知ることが出来ることから むしろ海図からの引用の線がよい。そのことを実証するかのごとく 現在でも多くの地図に引用されていないフデ岩が 当時の地図には筆ノ帽子として記載されていること 尖閣列島の島々を「SU」一洲? という記載になっていること ならびに 海図1号と呼ばれる釜石港図の磁北と真北を表現する凡例記号が類似している。そこで 海図の歴史をみてみると 明治4年(1871)の海軍水路局の創設にはじまり その年にはすでにフランス・イギリスらの軍艦に測量を許しており 柳権悦(水路局創設者)を艦長とする「春日艦」はイギリス軍艦「シルビア号」と共同して北海道沿岸の測量を行なっている。「春日」はこの帰途に釜石港の測量を独力で実施(海図1号)して自信をつけている。その後明治5年頃より 明治12年頃にかけて 第2丁卯丸日進 千代田らの軍艦によって 本土周辺ならびに台湾朝鮮沿岸の測量に従事していることが明らかにされている。このようなことから 賀田氏が引用した地図は「輯製20万分の1地図」よりも 海図より引用したよう

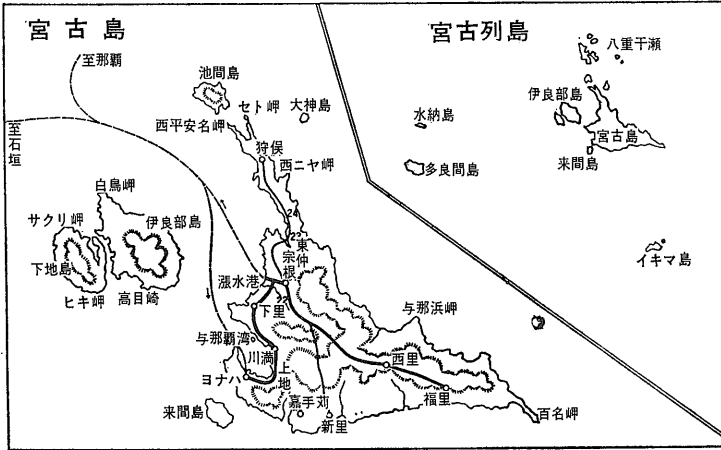
に考えられる。

一方柳田氏の引用した地図は 年代的にみても40年の後のことであり すでに5万分の1地形図も全国的規模で出来上がっていることもあって それらを基図としてつくられていた地図のように推測される。そのことが地図のうえにも表われている。すなわち 賀田氏の地図には 現在の下地島が 八重干瀬と同様な暗礁としてあつかわれているが 柳田氏の地図には「ケバ」がついており 現在の下地島と余り変わっていない。このよ



第13図
賀田真一(1885)氏の付図にみられるイキマ島 現在の下地島が暗礁としてあつかわれている

イキマ島



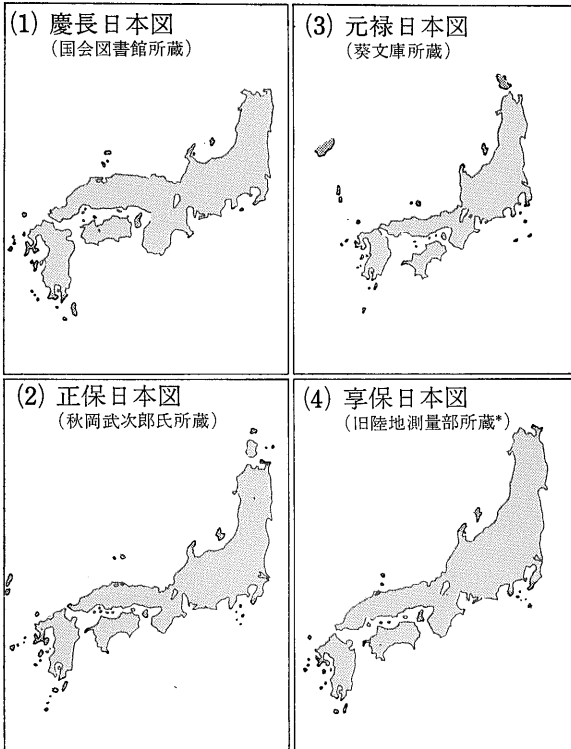
第14図 柳田国男氏の「海南小紀」(1925)に挿入されている地図 この地図では現在の下地島が陸化されており「ケバ」がすずについている

うな地図の歴史のなかからみて 賀田氏の引用した地図は海図の可能性が強い 柳田氏の引用した地図は 5万分の1地図を基図としてつくられたものであろうという結論になる。この筆者の考える結論が正しいということになれば イキマ島は宮古島の南の小島として何年間も存在したことになるし 下地島は比較的現代に陸化した島ということになる。

ここで取りあげたイキマ島は 北緯24.25° 東経125.25° 南北2km 東西4km で 両者の引用した地図とも同じであるが この島の北東方向に小島がみられることから 2つの島から出来ていたように思われる。島の周辺は 火山地域という推定がなされていない現時点では 島尻層群の上に琉球石灰岩がのっているような 宮古周辺の島々と同様な地質条件下にあるものと推定される。そして賀田氏の引用した地図にある「ケバ」から 周辺は10~30m内外の断崖が一部にみられることが予想される。このようにイキマ島は

海面に僅かに露出していた下地島や 八重千瀬のような暗礁ではなく「ケバ」の状況からみて 海面上にかなりの標高をしめしていたように思える。したがってこの島が どのような経過のなかで沈没したかを明らかにするには 周辺海域の調査が必要であることは勿論であるが そのほか隆起や陥没の地球科学的な仮説を組入れる必要がある。

隆起や陥没の原因の大部分は 断層に伴う地震と 火山活動に伴うものが通説となっている。しかしこの地域は 火山に関する情報が皆無のこともあって 火山活動よりの陥没は考えられない。したがって 地震活動による推測が当をえているように思う。そこでこの付近に起きた地震を調べてみると 次のようなものがある。



第15図 織田武雄氏の地図の歴史より

このうち特に明和8年3月10日(西暦1771)の地震は 南西諸島最大の津波(史上四位にランキングされる波高85mの大津波であった)が起り 死者11,941名を出した琉球歴史のなかで特記すべきものである。またこの近海で もっとも大きな地震は 明治44年6月15日(1911)のM8.2を記録した喜界島近海のものがある。このうちとくに明和の地震は 震源地も近く 何らかの形でイキマ島に変化をあたえたように考えられる。特に津波は 余りばらつくことがなく一個所に集中する傾向があることから 明和以前にも 何回かの津波の発生があったように推測される。このこと立証するかのごとく 宮古島の迷信のなかに便所を母屋から離して独立させて津波にそなえている。この津波は リニヤ湾に起きた史上最高(波高520m)に比較して小さいものであるが 湾外で起きたものとしては その類をみないであろう。この津波と直接結びつけてよいかどうかは 疑問である

